三重県多気郡明和町
斎宮跡埋蔵文化財調査報告18

史跡 斎宮跡

平成12年度現状変更緊急発掘調査報告

平成14(2002)年2月

明和町

序

明和町では、国史跡「斎宮跡」という貴重な文化遺産を保護・保存し、後世に受け継いで行くとともに、この史跡をどのように活用し、まちづくりに貢献させることができるかが課題となっていますが、このたび、三重県教育委員会により平成８年から「歴史ロマン再生事業」の一環として進められてきました「斎宮跡１／１０史跡全体模型」が完成し、「いつきのみや歴史体験館」を含めた「斎宮跡歴史ロマン広場」が３月３日に開園する運びとなりました。また、町も砂利広場や散策道の整備事業に着手し、無料休憩所等も整備して県内外から訪れる見学者に対する受け入れ態勢を整えることにいたしました。

今後は、多くの人に訪れていただき、歴史体験講座や芝生ひろばを活用したイベントなどに参加することで、いままで史跡に興味がなかった人も間接的に斎宮跡を知っていただき、わが町が歴史と文化のまちであることを認識していただけることと期待をいたしています。

この報告書は、平成12年度に42件提出された申請の中で事前発掘調査が必要であった10件と浄化槽等の立会い調査4件の結果についてまとめたものです。

現状変更に伴う調査は、第131-9次調査のように比較的まとまったものや第131-10次調査のように幅が0.8mと狭く延長が約44mに及ぶもの、また浄化槽のような非常に小さなものなど規模はさまざまですが、これらの調査箇所は広い史跡内を点在していることから、計画調査では得られない貴重な資料を与えてくれるものであり、これらの成果の積み重ねが斎宮跡を解き明かすものと思っています。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力いただきました地元地権者のみなさま、また、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた斎宮歴史博物館調査研究グループの方々に対してここに厚くお礼申し上げます。

平成 14（2002）年２月

明和町教育委員会

町 長　木戸口　眞澄

目　　次

1　前　　言……1
2　第131－１次調査……2
3　第131－２次調査……3
4　第131－３次調査……3
5　第131－４次調査……4
6　第131－５次調査……6
7　第131－６次調査……8
8　第131－７次調査……10
9　第131－８次調査……11
10　第131－９次調査……12
11　第131－10次調査……13
付編１　史跡現状変更等許可申請……14
付編２　立会い調査（第131－11～15次調査）……16
付編３　不同沈下のための地盤改良結果報告……20
報告書抄録……22

表・挿図目次

〔表〕1　史跡現状変更等許可申請の推移……1
2　平成12年度現状変更等許可申請一覧表……15
3　第131次調査出土遺物観察表……19
〔図〕1　発掘調査地区位置図（1：10,000）
2　第131－１次調査　調査区位置図（1：5,000）……2
3　〃　遺構実測図（1：200）……2
4　第131－２次調査　調査区位置図（1：5,000）……3
5　〃　北壁土層断面図（1：40）……3
6　第131－３次調査　調査区位置図（1：5,000）……3
7　〃　グリッド配置図（1：200）G5・G6遺構図（1：100）……4
8　第131－４次調査　調査区位置図（1：5,000）……4
9　〃　調査区配置図（1：200）……5
10　〃　土層断面図（1：40）遺物実測図……5
11　第131－５次調査　調査区位置図（1：5,000）……6
12　〃　遺構実測図（1：200）……7
13　〃　遺物実測図……7
14　第131－６次調査　調査区位置図（1：5,000）……8
15　〃　遺構実測図（1：200）……9
16　第131－７次調査　調査区位置図（1：5,000）……10
17　〃　遺構実測図（1：200）……10
18　第131－８次調査　調査区位置図（1：5,000）……11
19　〃　遺構実測図（1：200）……11
20　第131－９次調査　調査区位置（1：5,000）……12
21　〃　遺構実測図（1：200）……12
22　第131－10次調査　調査区位置図（1：5,000）……13
23　第131－11次調査　調査区位置図（1：5,000）……16
24　〃　遺構実測図（1：100）……16
25　第131－12次調査　調査区位置図（1：5,000）……17
26　〃　遺構実測図（1：100）……17
27　第131－13次調査　調査区位置図（1：5,000）……17
28　〃　遺構実測図（1：100）……18
29　第131－14次調査　調査区位置図（1：5,000）……18
30　〃　遺構実測図（1：100）……18
31　第131－15次調査　調査区位置図（1：5,000）……19
32　〃　遺構実測図（1：100）……19

写 真 図 版

PL１　第131－1　次調査　上；調査前全景（南から）　下；調査区全景（南から）
PL２　第131－2,4　次調査　上；２次調査区全景（南から）　下；４次調査Ｇ１（東から）
PL３　第131－4　次調査　上；Ｇ５（南から）　下：Ｇ６（西から）
PL４　第131－5　次調査　上；調査区全景（西から）　下；調査区近景（西から）
PL５　第131－6　次調査　上；調査区全景（南から）　下；調査区近景（西から）
PL６　第131－7,9　次調査　上；７次調査区全景（北から）　下；９次調査区全景（北から）
PL７　第131－8　次調査　上；調査区全景（南から）　下；調査区近景（西から）

例　　言

1　本書は、明和町が平成12年度に実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急発掘調査の結果をまとめたものである。

なお、第131-1、3～9次調査は、国庫及び県費の補助金を受けて実施したものであり、第131-2,10次調査は、公共事業として実施したもので、事業者が費用を負担した。

2　調査は、明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館調査研究グループ及び明和町教育委員会斎宮跡課が現地調査を担当した。

3　遺構の実測にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。

4　遺構の時期区分は、「斎宮跡の土器編年」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』2001）による。

5　遺構表示は、次のとおりである。

ＳＢ；竪穴住居・掘立柱建物　ＳＡ；掘立柱塀・柵　ＳＥ；井戸　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝
ＳＦ；道路　ＳＸ；その他

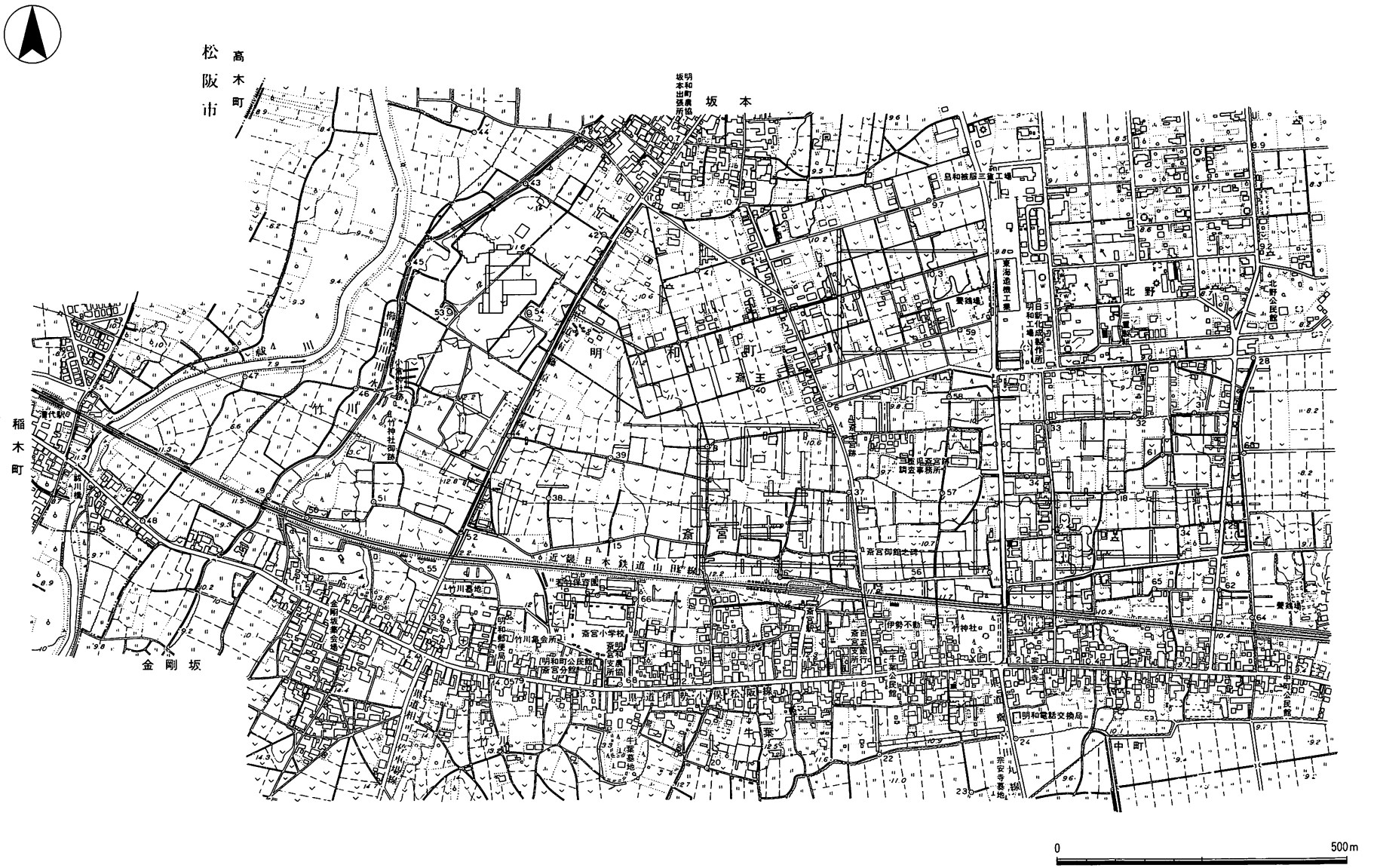
6　特に標示がない限り、遺物の実測図は実物の４分の１である。

7　調査の実測図・写真等の関係書類及び出土遺物は、斎宮歴史博物館で保管している。

8　現地の発掘調査及び本書の作成には、斎宮歴史博物館調査研究グループの駒田利治、泉雄二、大川勝宏、西村美幸、学芸普及グループの天野秀昭、宇河雅之と明和町教育委員会斎宮跡課の中野敦夫、瀬田敏彦、宇都宮英治が担当した。

また、遺物整理等にあたっては、西村秋子、杉原泰子、八木光代、山口香代があたり、、大西瞳（花園大学学生）の参加を得た。

なお、付編　立会い調査（第131-11～15次調査）の浄化槽設置に伴う調査については、現地調査を大川が担当し、本報告は駒田が行った。



第1図　発掘調査地区位置図（1：10,000）

1　前　　言

斎宮跡では、史跡指定以来22年間で991件の史跡現状変更等の許可申請が出されており、平成12年度は42件の申請が提出された。その内容は、史跡内住民による住宅や農業用倉庫の増改築あるいは道路や排水路の改修・新設であり、申請内容に応じ、発掘調査あるいは立会い調査等を実施し、遺構の確認とその保護に努めている。史跡内の住民生活にとって公衆衛生上推進されている浄化槽の設置は近年急速に普及してきており、下水道事業開始までの暫定措置として、立会い調査を実施しているが、その調査結果については、調査条件に制約が大きいが、昨年度から本報告書に掲載することとした。

第131－１次調査は、河岸段丘下の水田地帯で行った数少ない調査であったが、江戸時代の溝を確認するなど遺構の存在を確認できたことは、今後の調査や史跡保護の上で有意義であった。一方、遺構下層は、砂礫層となっており、詳細な調査を実施していく必要性も認められた。

第131－２次調査や第131－10次調査は、水道管埋設工事や排水路の改修等に伴う調査であり、昨年度からすべて事前の発掘調査としており、事業者の理解も得られ、遺構面を損なわないよう設計されるケースも多く、既存の撹乱層あるいは遺物包含層内で掘削が行われ、遺構面は保護されている。

第131－６次調査は、史跡北部をめぐる鎌倉時代の大溝周辺の調査であり、ほぼ同じ位置に溝が付替えられていることは、この溝の性格を表しており、並存する道路状遺構と合わせ当該時期の斎宮跡考究の大きな鍵を握っている。

第131－５次調査は、住宅建設地の駐車場予定地で実施し、不同沈下に対する対応方法として試みに実施した調査であり、方法論や現状変更への対応が検討される一つの課題を提供できた。

第131－９次調査は、大溝の北側に位置し、この調査区では樹木の生い茂る状況が風倒木の確認から知られ、史跡の景観的環境や土地利用を知る上でも貴重な事例となった。

一方、第131－11次～15次調査は、浄化槽埋設に伴う調査であり、調査に制約が大きいが、遺構の記録保存に万全を期した。

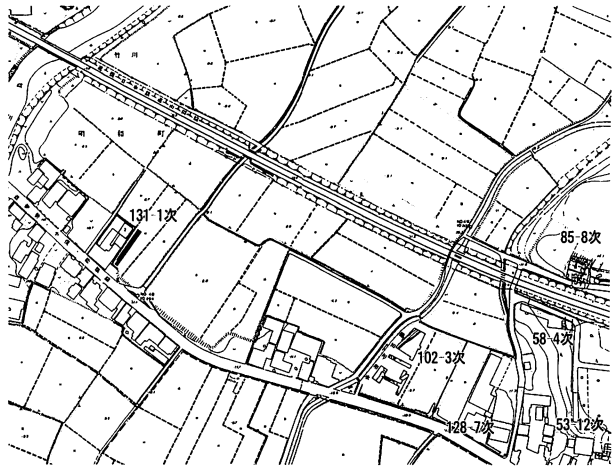
これら現状変更に伴う緊急発掘調査は、様々な制約から必ずしも充分な調査とは言えない面をもっており、史跡の保存にとっても少なからず問題を抱えているが、斎宮跡の解明にとって一助となっており、調査上の制約や調査実施上の困難を解決しなければならない。　　（駒田利治）

年度	現状変更申請数	発掘調査件数	調査面積（㎡）	補助金調査件数	同調査面積（㎡）
S54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620
63	46	17	8,820	7	1,131
H元	57	16	7,091	9	1,061
2	58	8	1,397	5	914
3	46	3	1,550	1	1,190
4	41	6	895	5	825
5	48	8	1,670	6	1,090
6	35	6	1,360	4	1,032
7	39	2	587	1	480
8	47	6	709	4	613
9	39	6	832	2	452
10	28	4	882	2	396
11	37	8	816	3	186
12	42	10	512	8	469
計	991	216	51,043	145	20,093

第１表　史跡現状変更等許可申請の推移

2　第１３１－１次調査（６ＡＡＯ）

調査場所　　多気郡明和町竹川字祓戸741
原　　因　　進入路造成工事
調査期間　　平成12年４月７日
調査面積　　68㎡



第２図　第131－1次調査　調査区位置図（1：5,000）

１）はじめに　　今回の調査は、県道伊勢小俣松阪線（旧参宮街道）北側の祓川沖積地上の水田地に、農業用機械の出し入れのために住宅に接する進入路造成に先だって行った調査である。

当該調査区周辺では、これまで調査は行われておらず、地下遺構の様相は不明であった。

２）調査概要

イ　遺　構　　調査は、進入路計画地の幅３ｍ、延長27ｍにわたって実施した。遺構検出面までの深さは南側で約0.2m、北側で約0.4mである。調査区の基本層序は、第Ⅰ層；暗青灰色粘質土の耕作土、第Ⅱ層；灰色粘質土の床土、第Ⅲ層；浅黄色粘質土、第Ⅳ層；灰色粗砂の遺構検出面であり、明確な遺物包含層は認められなかった。

遺構は、第Ⅲ層から掘り込まれたSD8320の溝１条を確認した。SD8320は、調査区の南部で検出され、調査区に直交する東西方向と考えられ、幅約2.4m、深さ約0.4mである。

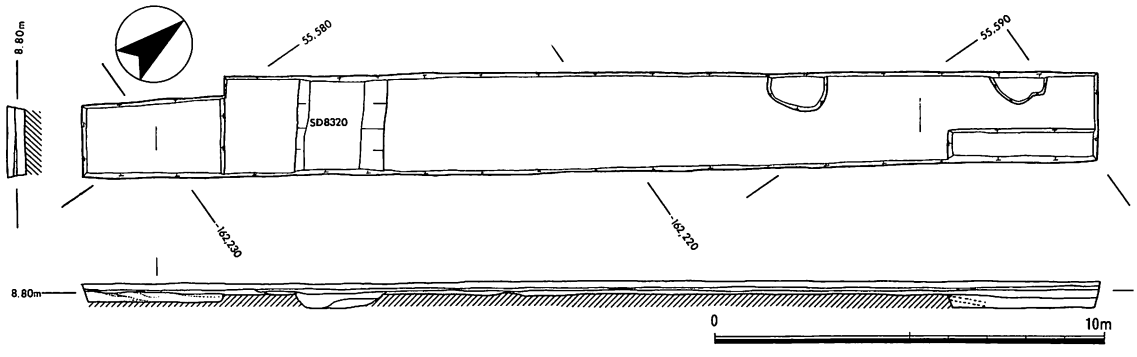
出土遺物は、江戸時代の陶磁器類であり、存続時期は江戸時代後半と考えられる。

ロ　遺　物　　遺物は、整理箱１箱分が出土し、殆どが江戸時代の土器類及び陶磁器類であり、江戸時代の遺構と判断される。

一方、平安時代後期の土師器片も出土しているが、表面が磨耗を受けている。

ハ　まとめ　　今回の調査では、これまで様相がわかっていなかった史跡西部の祓川沖積地での様相の一端が明らかにされたことは、今後の調査方法を検討するうえで重要である。

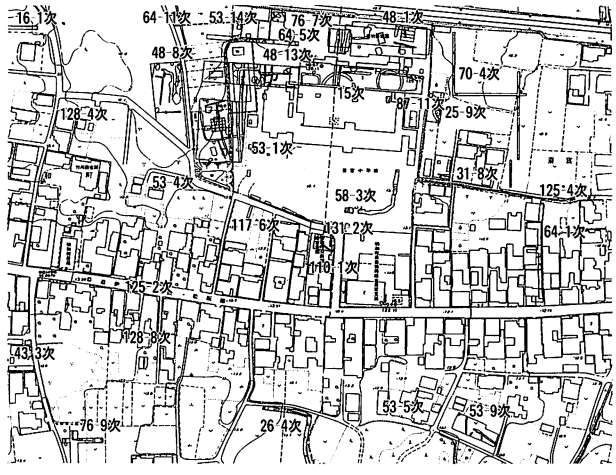
（西村美幸）



第３図　第131－1次調査 遺構実測図（1：200）

3　第１３１－２次調査（６ＡＣＱ）

調査場所　多気郡明和町竹川字東裏282－1
原　　因　水道管布設
調査期間　平成12年８月21日
調査面積　７㎡



第４図　第131－2次調査　調査区位置図（1：5,000）

１）はじめに　今回の調査は、県道伊勢小俣松阪線（旧参宮街道）北側の住宅密集地内の消防車庫新設に伴う水道管の埋設工事に先だって行った調査である。

当該地区は、斎宮跡方格地割の西側に位置し、第三種保存地区内にあり、現状変更に伴う小規模な調査が行われており、南に隣接する第110－1次調査（平成７年度）では、７世紀前半の周溝遺構が確認されている。

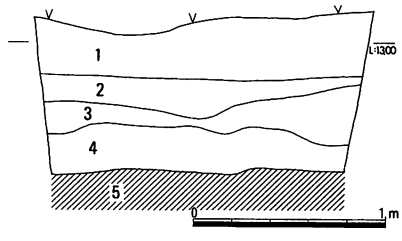
２）調査概要

イ　遺　構　調査は、水道管埋設予定地の延長3.8mに溝掘りを行い、埋設の深さ約0.8mまで掘り下げたが、遺構面には達せず、遺物包含層は削平されていた。因みに第110－１次調査では、現表土下0.8～0.9mで遺構を確認している。

ロ　遺　物　遺物は、土師器の細片のみである。

ハ　まとめ　今回の調査では、遺物包含層は削平されており、今回の現状変更では遺構確認面がき損する恐れはない。

（大川勝宏）

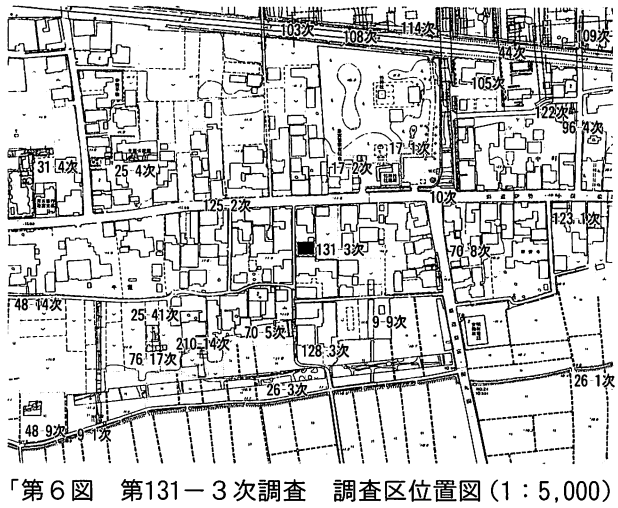


1　盛土　2　黒褐色粘質土（撹乱土含む）
3　黒色粘質土　4　褐灰色粘質土
5　にぶい黄橙色粘土（地山）

第５図　第131－２次調査調査区北壁土層断面図（1：40）

4　第１３１－３次調査（６ＡＥＵ）

調査場所　多気郡明和町斎宮字牛葉571
原　　因　住宅新築
調査期間　平成12年７月５日
調査面積　６㎡



「第６図　第131－３次調査　調査区位置図（1：5,000）

１）はじめに　今回の調査は、県道伊勢小俣松阪線（旧参宮街道）南側の住宅密集地内の個人住宅の新築に伴い、基礎部分が地下遺構に影響を及ぼす恐れがり、工事に先だち行った調査である。

当該地区は、斎宮跡方格地割の「鈴池東」区画内に位置し、第三種及び第四種保存地区内にあり、現状変更に伴う第70－５次調査（昭和62年度）、第128－３次調査（平成11年度）等が行われている。

２）調査概要

イ　遺　構　調査は、建物基礎６ヵ所に各１ｍ×１ｍの調査グリッドを設定して、基礎の掘削深度約85cmまで掘り下げたが、北側のＧ１～Ｇ３グリッドでは、遺構検出面に達せず、遺物の出土も認められなかった。

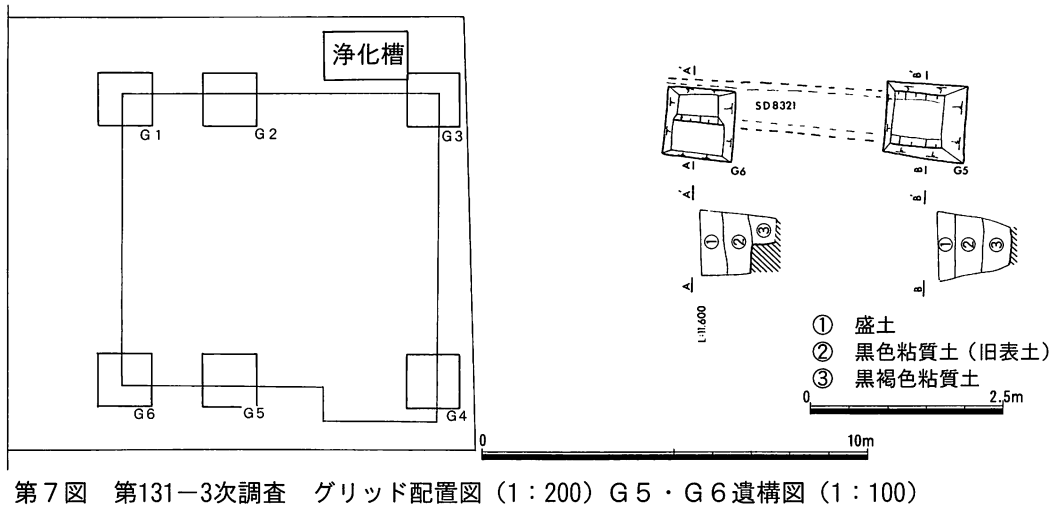
南側のＧ４～Ｇ６グリッドでは、現表土下0.6～0.7ｍで遺構検出面を確認し、Ｇ５・Ｇ６グリッドでは、東西方向に延びると考えられる溝SD8321が検出された。溝の調査も基礎部分の掘削深度の深さまでの調査とした。調査の結果、SD8321は、溝上幅0.7～0.8ｍの規模と考えられる。遺物の出土は、認められず存続時期は不明である。

また、Ｇ４グリッドは、上面が近現代の撹乱を受け、遺構・遺物とも認めらない。

ロ　遺　物　遺物は、表土及び遺物包含層から土師器の細片が出土したのみである。

ハ　まとめ　今回の調査では、時期及び機能を明確にすることはできなかったが、東西方向の溝SD8321を確認したことは、方格地割の南北の区画間道路に直交する溝の存在が明らかになった。

（大川勝宏）



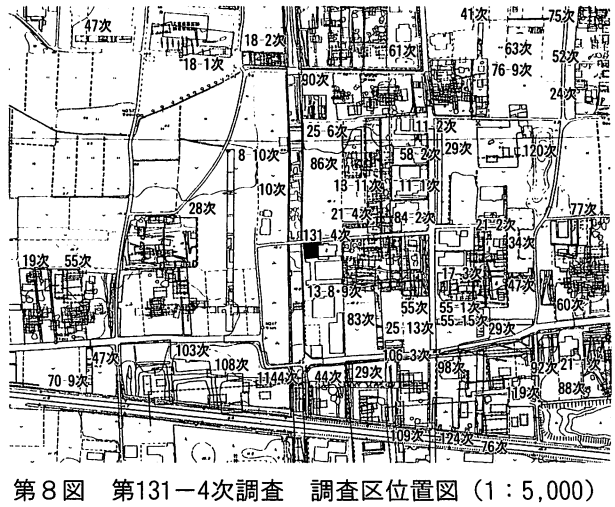
第７図　第131－3次調査　グリッド配置図（1：200）Ｇ５・Ｇ６遺構図（1：100）

５　第１３１－４次調査（６ＡＦＧ－Ａ）

調査場所　多気郡明和町斎宮字西加座2773－1
原　　因　事務所改築
調査期間　平成12年８月28日
調査面積　38㎡

１）はじめに　今回の調査池は、斎宮跡方格地割の北から２列目、東から３列目の「西加座南」区画西側の区画間道路推定地上に位置する。

調査地の西側を南北に通る広域圏道路は、第10次調査（昭和50年度）



第８図　第131－4次調査　調査区位置図（1：5,000）

として実施しており、東に隣接する区画内では、第83次、第84－1次、第84－2次調査（平成元年度）を実施し、四隅が途切れる溝状遺構が巡る４間×２間の建物が鈎形に配置され、全体が掘立柱塀に区画された特異な空間も確認され、祭祀の空間と理解している。

また、当該調査区の敷地内では第13－8,9次調査（昭和51年度）に現状変更に伴う緊急発掘調査も実施している。

２）調査概要

イ　遺　構　調査は、事務所新築の基礎部分と浄化槽設置予定地についてG1～G９グリッドを設定して調査を行った。

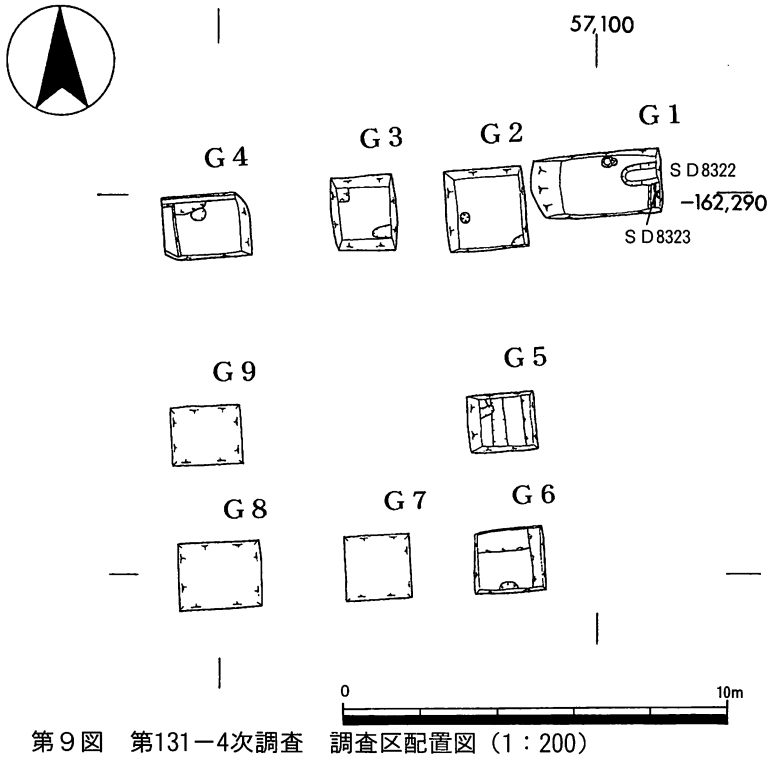
調査グリッドは、いずれも0.7～0.8mの厚さの盛土に覆われ、現地表面から0.8～0.9mの深さで遺構検出面に達する。

Ｇ１～Ｇ６では、遺構検出面の黄褐色粘土層上で小規模なピット・溝を確認したが、Ｇ７～Ｇ９では工事の掘削範囲内では遺構検出面に至らず遺構面は保護できた。

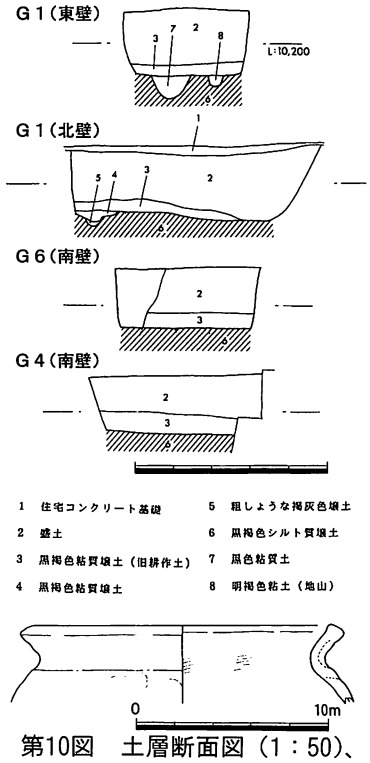
Ｇ１～Ｇ６のピット・溝は、相互に関連していない。Ｇ１の東西溝SD8322は、深さ約0.3mの断面U字形のもので、調査区外の東へ延びている。またこのSD8322と接する幅約0.2mの南北溝SD8323も確認された。Ｇ６では、第13－8,9次調査で検出した溝を再確認した。

ロ　遺　物　Ｇ１以外では遺構保護のため遺構埋土の検出を行っておらず、遺物は少ない。SD8322から土師器高杯片、SD8323から土師器甕片が出土し、ともに平安時代前半期のものと考えられる。また、Ｇ５から須恵器甕片、Ｇ６の撹乱層から平安時代中期頃の土師器甕片（１）が出土している。

ハ　まとめ　今回の調査区は、奈良時代後期（斎宮跡第Ⅰ期第4段階）に造営され、平安時代前半期（斎宮跡第Ⅱ期）を中心に機能した方格地割の南北道路上に位置するが、道路遺構等は明確にされなかった。しかし、東で隣接する第83次、第84次調査と異なり、遺構密度が薄いのは、この地区が道路遺構面上に位置することによる。　（大川勝宏）



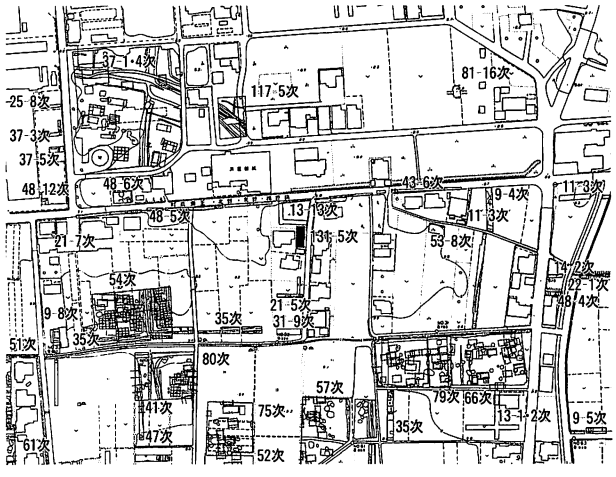
第９図　第131－4次調査　調査区配置図（1：200）



第10図　土層断面図（1：50）、遺物実測図

6　第１３１－５次（６ＡＧＤ－Ｉ）

調査場所　多気郡明和町斎宮字東前沖2494－2
原　　因　住宅新築
調査期間　平成12年９月２１日～９月22日
調査面積　76㎡



第11図　第131－5次調査　調査区位置図（1：5,000）

１）はじめに　今回の調査区は、史跡東部の方格地割北側の住宅地内に位置する。

周辺では、北で隣接する住宅地で第13－13次調査（昭和51年度）、南で第21－5次（昭和53年度）等の住宅建築、あるいは町道等の公共事業に伴う調査など小規模な調査が多い。南の第35次調査（昭和55年度）では、方格地割の北辺北側溝を確認している。

今回の調査は、史跡地内における現状変更申請において、生活に不可欠な住宅等の建築に伴って生じる可能性がある不同沈下に対処するため、土壌改良の具体的な検討を行う事を前提とした。これと呼応して、発掘調査においても不同沈下の原因を最大限除去し、調査対象を把握することができないかといった課題に対して、一つの試みととして実施したものである。

２）調査概要

イ　遺　構　調査地は、標高9.2mの旧表土上に宅地のための盛り土が厚さ0.5mほどなされている。旧表土上面から遺構確認面までの深さは、0.45～0.5mである。遺構面は平坦であり、標高8.8mほどの明黄褐色粘土層面で確認される。確認した遺構は、平安時代後期以降の溝８条及び土抗１基などである。

平安時代後期　ＳＫ8324は、長径約2.5mの楕円形と推定される。深さは、遺構確認面から約５㎝で調査を止めているので不明である。暗褐色粘質土を埋土とし、土師器皿が出土している。

ＳＤ8325は、調査区中央で確認し、調査区をほぼ南北方向に延びる溝であり、溝方向は、北から東へ約６°振っている。北の第13－13次調査で検出している溝に繋がる。南約30mの第21－5次調査では、想定される位置では確認されていない。ＳＤ8325は、ＳＫ8324と同じく暗褐色粘質土を埋土とするが、両者の新旧関係は明らかにできなかった。重複関係からＳＤ8325は、ＳＤ8326・ＳＤ8327に先行する。溝の規模は、調査区の両端と中央の3ヵ所に幅約0.3mのトレンチを設定し、上幅0.7m、下幅0.2m、深さ0.4mで断面が逆台形なしている。溝底の標高は約8.2mでほぼ水平である。トレンチ内から山茶椀底部が出土し、山茶椀編年の第Ⅱ形式から第Ⅲ形式に属し（藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982）、12世紀代の年代が考えられ、平安時代末期には埋没したものと考えられる。

ＳＤ8326は、調査区北端で確認した溝であり、幅約1.2m以上で、深さは約0.1mと浅く、溝底まで完掘した。このＳＤ8326は、第13－13次調査北西隅で確認している斜めに延びる溝と同一のものと推定される。埋土は、暗灰褐色である。重複関係からＳ

D8325より後出する。

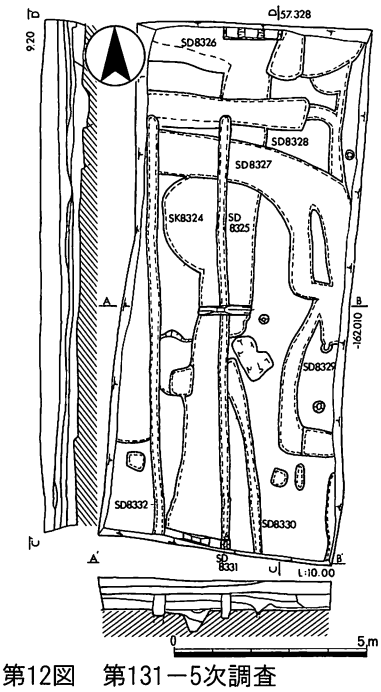
ＳＤ8330は、調査区北西部で確認した幅0.3m、深さ数cmの浅い溝である。溝埋土は、暗褐色粘質土となり、南のＳＤ8326と形状・埋土を同じくし、同一の溝と考えられる。重複関係からＳＤ8327に先行する。

ＳＤ8330は、調査区南の中央部で確認した溝で、幅0.1～0.2m、深さ数cmの浅い溝である。

近　代　ＳＤ8331・ＳＤ8332は、幅約0.1m、0.3mの小規模な溝であり、垂直に掘り込まれる。耕地として利用されていたときの、農耕用の溝である。

ロ　遺　物　出土遺物は、遺構を完掘していないこともあり、整理箱（54cm×34cm×15cm）で２箱と少ない。遺物の中心をしめるのは土師器と山茶椀である。

ＳＫ8324からは土師器小皿（１・２）の破片が出土しているが、表面がかなり摩耗しており、口縁部のヨコナデがわかるのみである。ＳＤ8325・ＳＤ8326から出土した山茶椀（３・４・５・６）は、高台に籾殻痕がつくなど、その形態等から第Ⅲ段階第５形式に属すると考えられる。



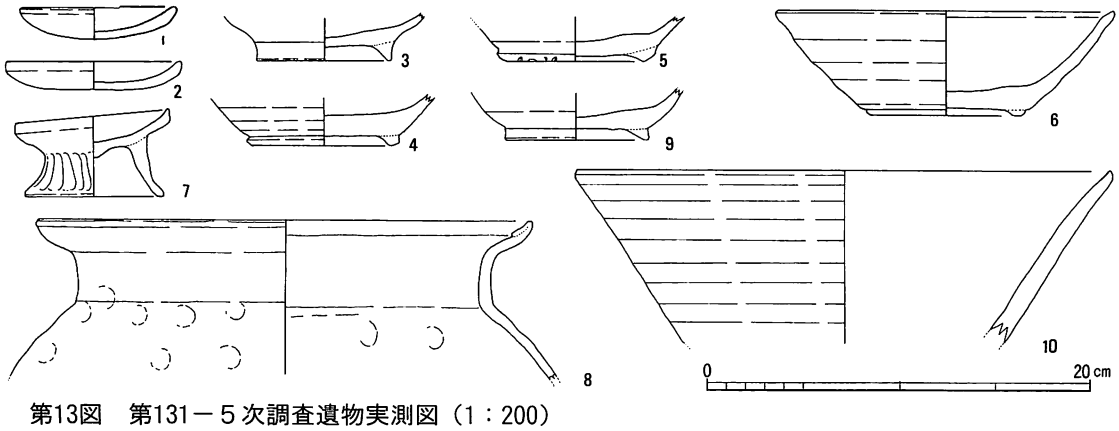
第12図　第131－5次調査
遺構実測図（1：200）

この他、包含層からは土師器台付皿・鍋、山茶椀、陶器鉢が出土している。台付皿（７）は、脚部成形のねじり痕が残る。また鍋（８）は、口縁部が立ち上がっており、形態から平安時代後期と考えられる。山茶椀（９）については、ＳＤ8325・ＳＤ8326同様第Ⅲ段階第５形式に属すると考えられる。陶器鉢(10)についても、平安時代後期であろう。

ハ　まとめ　今回の調査区では、平安時代後期に埋没し、方格地割と方向を異にする南北方向の溝を確認できた。この溝の機能については、周辺地区の調査結果をまって検討すべきものであると考えられる。

今回、現状変更に伴う不同沈下対策に対応する調査方法として試みに実施した調査方法は、今回の調査区のように遺構密度が低く、重複関係の少ない溝の事例のように単独遺構の調査では、遺構を完掘しなくとも遺構の規模・時期の特定は不可能でないことが明らかにできた。その中で、周辺地区の調査結果の検討や遺構埋土による埋没時期の吟味等がより重要であることも明確になってきている。

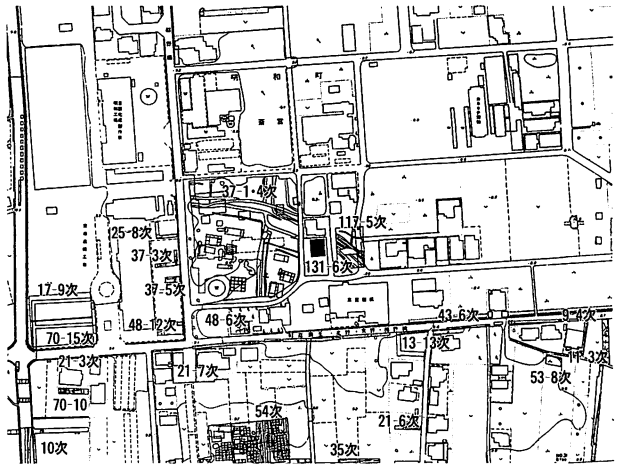
今後は、他の条件下での可能性を検討することとし、発掘調査においても遺構を損なうことなく、後世に伝えていく方法も検討したい。　（駒田利治　山口香代）



第13図　第131－５次調査遺物実測図（1：200）

7　第131－6次調査（６ＡＦＣ－Ｍ）

調査場所　多気郡明和町斎宮字東前沖2505－2
原　　因　駐車場造成工事
調査期間　平成12年９月19日～９月21日
調査面積　108㎡



第14図　第131－6次調査　調査区位置図（1：5,000）

１）はじめに　今回の調査区は、史跡北東部の戦前に軍の施設の建設されていた地域内に位置する。

調査区の西側では第37－１・４次調査（昭和56年度）、東側では第117－５次調査（平成８年度）が実施されている。第37－１・４次調査では史跡の北部を囲む鎌倉時代の大溝のほか、平行する溝群を検出し、第117－５次調査でもその続きを確認している。今回の調査地はこられの調査区に挟まれ、鎌倉時代の溝群の検出が予想される場所である。

なお、第37－1・４次調査では「水司鴨口」のヘラ書き土器が出土しており、斎宮跡の官衙配置を考察する資料を提供したが、周辺地区での調査が現状変更に限られているため、不明な点の多い地域である。

２）調査概要　表土から遺構面までの深さは、南から北に向かってやや深くなるが、概ね0.2mである。家屋の基礎などや、南北方向に走る現代の溝によって壊されている。

イ　遺　構　遺構は、鎌倉時代の道路、溝２条のほか、時期不明の溝1条がある。

ＳＤ2435は、調査区西側の第37－４次調査から続くもので、調査区北西から南東方向に延びる東西溝である。幅1.7m、深さは一部だけ掘り下げて0.5m（標高約８m）であることを確認した。ＳＤ2435は、道路ＳＦ2427の南側溝で、北側溝ＳＤ2428は調査区の北側に位置するため検出できなかった。

ＳＦ2427は、南側の遺構面から0.2mほど低く、５～10cm大の礫が多量に認められ、道路面に敷き詰めたものと考えられる。

ＳＤ8333は、ＳＤ2435に直交するように道路面で確認した幅0.2m、深さ0.05mの小規模な南北溝で、遺物は出土していない。道路面でのみ検出したことから道路に伴う遺構と考えられ、第37－4次調査でも同様の溝があり、暗渠的な排水施設用と考えられる。

ＳＤ8334は、調査区南部にある幅0.5m、深さ0.2mの弯曲する小さな溝である。埋土は黒褐色で近現代の埋土ではないが、出土した遺物がないため時期は不明である。

この他、調査区南端中央で検出した柱穴からは土師器甕の破片を数片出土しているが、建物については不明である。

ロ　遺　物　土師器、須恵器、山茶椀の細片が整理箱に1/3程度と非常に少ない。ＳＤ2435からは、山茶椀の底部片のほか土師器・須恵器などの破片がわずかに出土している。

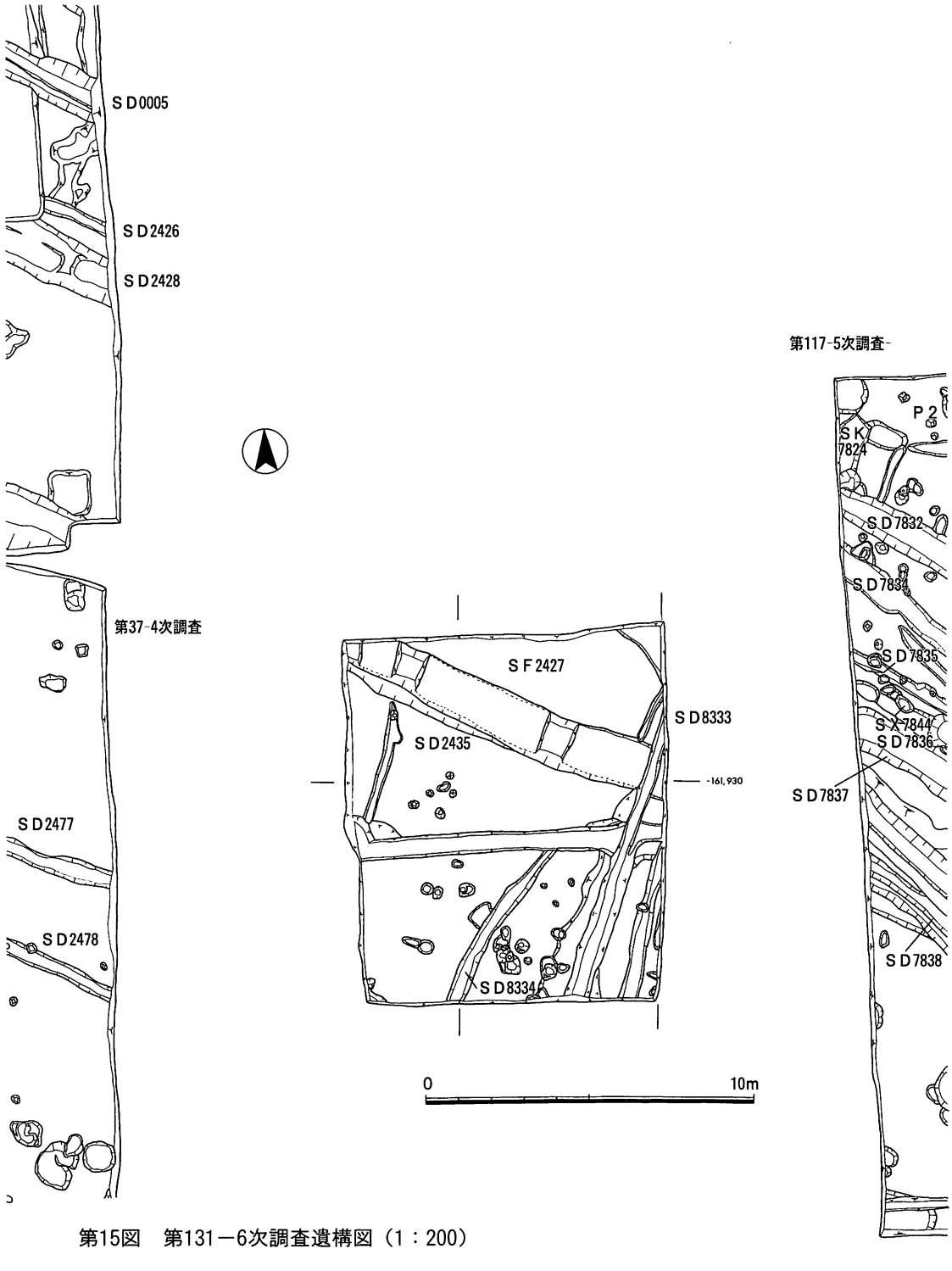
ハ　まとめ　今回の調査では、第37－４次調査で確認されていた鎌倉時代の道路ＳＦ2427の延長を確認することができた。また、道路はさらに東に延びることから、第117－５次調査

について再検討してみる。

第117－5次調査のＳＤ7837・7838は、鎌倉時代の大溝ＳＤ0005に繋がるものと考えられていたが、ＳＤ7838の海抜高が８ｍと南側溝ＳＤ2435とほぼ同じことや隣り合う位置から見て同一の溝と判断できる。

北側溝は第37－４次調査の東側ではＳＤ2428・2426のいずれとも決めがたく、第117－5次調査でもＳＤ7838の約６ｍ北にあるＳＤ7832である可能性が高いが、平行する溝を数条検出しており、２～３本以上の道路を想定することが出来るため断定は出来ない。

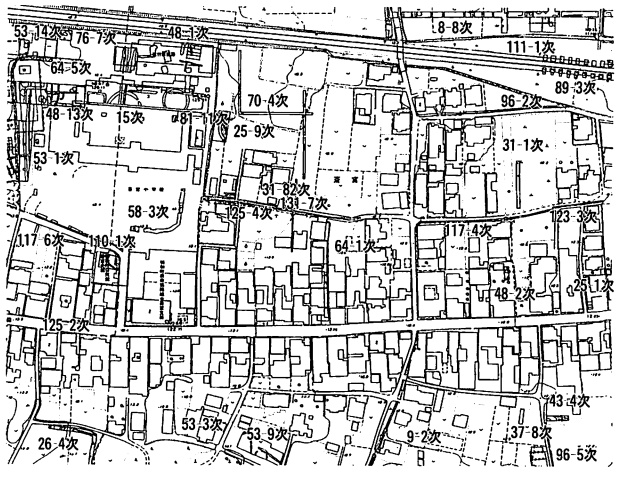
いずれにしても、鎌倉時代を中心とする史跡の北部を囲む幾条にもおよぶ道路の存在は斎宮跡の当該期を考える上で興味深い資料と言える。　　（泉　雄二）



第15図　第131－6次調査遺構図（1：200）

8　第131－7次調査（６ＡＣＯ－Ｆ）

調査場所　　多気郡明和町斎宮字牛葉3397－2
原　　因　　排水管設置
調査期間　　平成12年9月26日～27日
調査面積　　18㎡



第16図　第131－7次調査　調査区位置図（1：5,000）

１）はじめに　　今回の調査は、斎宮小学校東の個人の敷地内において既設の配水管が降雨時に逆流する恐れがあるため、新規に排水管を設置し、町道の側溝に流し込むものである。周辺では、第125－4次調査（平成10年度）が行われている。

２）調査概要

イ）遺　構　　調査区は、幅約0.6m、延長約27mで設定した。また、地下遺構の保護のため、排水管埋設深さまでの検出にとどめた。そのため、調査区南端付近から中央付近までは遺構検出面に達しなかった。

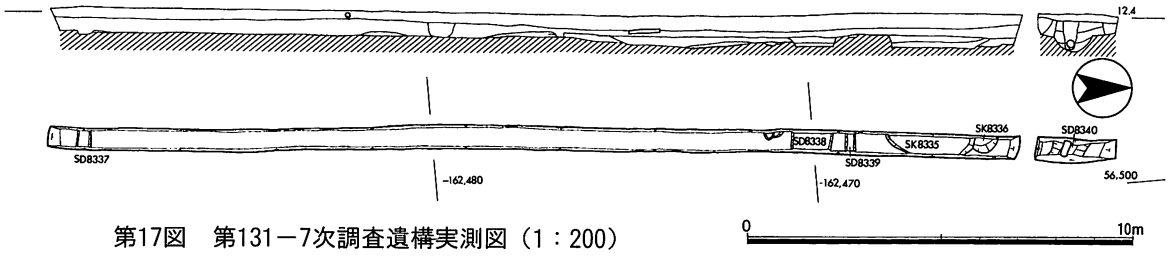
検出した遺構は、溝４条・土坑２基とピットである。ＳＤ8337は、調査区にほぼ直行するもので調査区南端で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。ＳＤ8338は、幅1.0～1.1m、途中で止めたため、深さは不明である。ＳＤ8339は、幅0.25m、いずれも遺物は出土していない。ＳＤ8340は、、幅約1.0m、深さ約0.4mである。

ＳＫ8335・8336は、調査区北部で検出された。重複関係よりＳＫ8336がＳＫ8335より新しい。ＳＫ8336は、調査を途中で止めたため深さは不明である。これらの土坑からは近代の遺物が出土している。

ロ）遺　物　　ＳＫ8335・8336から近代の遺物が、調査区南端の包含層から平安時代の土師器片が出土したのみである。

ハ）まとめ　　今回の調査では調査区にほぼ直行する溝と近代の土坑を検出した。溝は、調査区の幅が狭く、方向の確定は困難であるが、すべて東西方向のものである点が注目できよう。

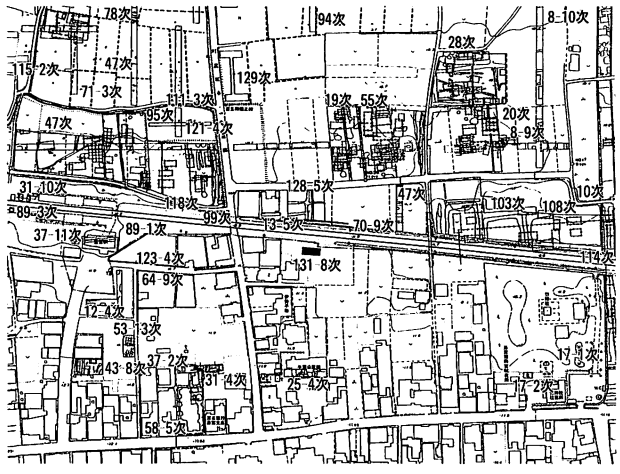
また、遺構面の深さは南端とＳＤ8337の北側で11.9m、ＳＤ8338付近で11.7m、ＳＤ8339付近でまた11.9m、北端で11.8mとなっている。　　（西村美幸）



第17図　第131－7次調査遺構実測図（1：200）

9　第131－8次調査（6AER－J）

調査場所　多気郡明和町斎宮字御館2975-2ほか
原　　因　住宅新築
調査期間　平成13年1月15日～1月19日
調査面積　50㎡



第18図　第131－8次調査　調査区位置図（1：5,000）

1）はじめに　調査地は、方格地割の北から3列目で東から5列目の区画にあたる牛葉西区画の北西部、近鉄線線路の南側に接する地点に位置する。牛葉西区画は、これまでの調査例が殆どなく、内部の様相が不明確な区画である。周辺の調査では、近鉄線の線路を挟んだ北側で行われた第128－5次調査（平成11年度）で、牛葉西区画と北隣の御館区画を区切る東西方向の道路遺構が確認されている。

2）調査概要　調査区は、東西約11m、南北4.5mで設定した。表土から遺構検出面までの深さは、約0.4mで、遺構検出面の標高は約11mであった。

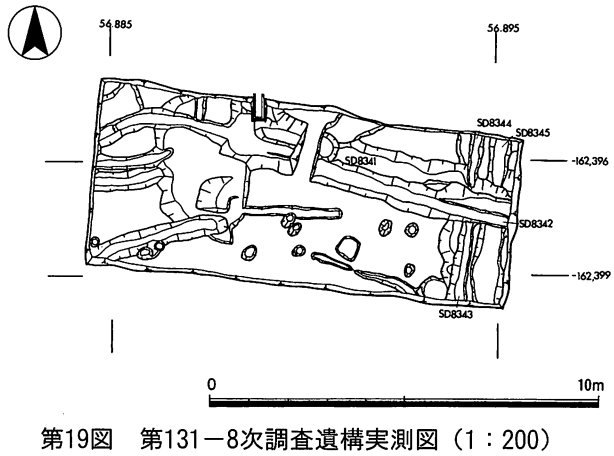
また、調査区の北西部の埋土の一部には黒褐色砂質土（黒ボク）が認められた。

イ　遺　構　調査区を東西方向に延びる溝と調査区東端を南北に延びる溝を確認した。東西溝のSD8341は、幅約1.4mであるが、検出面から約20cm掘り下げたところで下層のSD8342が検出された。SD8342は、上面の幅約0.7m、溝底の幅約0.3m、深さ約0.2m、断面は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色でしまりも良く比較的安定したものである。出土遺物から平安時代後半に位置付けられるものであり、この調査区で最も時期の古い遺構である。この東西溝は、方位がE15°Sで、方格地割の方位とは異なり、むしろ史跡内の北西から南東に走る奈良時代の道路遺構に近い方位を示すものである。なお、下層のSD8342は、調査区西端部でやや南に屈曲している。

また、調査区東端部では、南北方向に延びる幅約1.5mのSD8343を確認した。この溝についても検出面から約10cm下げた下層において、平行して延びるSD8344とSD8345を検出した。いずれも北端部では埋土に樹木の根痕が含まれるなど、やや軟質な埋土であった。

これらの溝の時期は重複関係により、古いものから、SD8342、SD8341、SD8344・8345、SD8343という順序で捉えることができるものあった。

その他、調査区南半で樹木の根痕と思われる小穴が散在して確認された。



第19図　第131－8次調査遺構実測図（1：200）

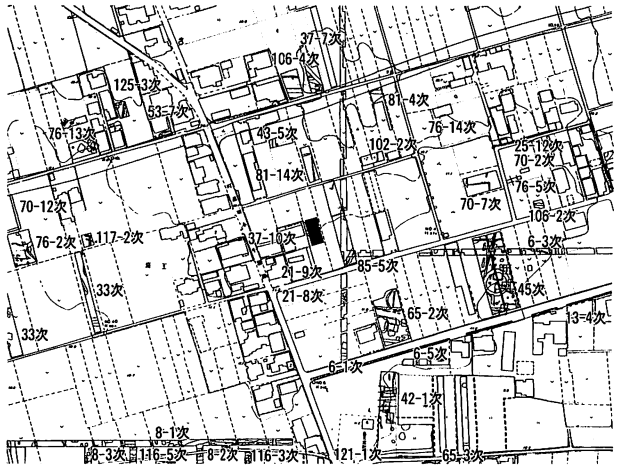
ロ　遺　物　遺物の出土は整理箱に2箱程度と

非常で少量であったが、平安時代の遺物が中心に出土しており、鎌倉時代以降に下る遺物は包含層に僅かにみられた程度であった。

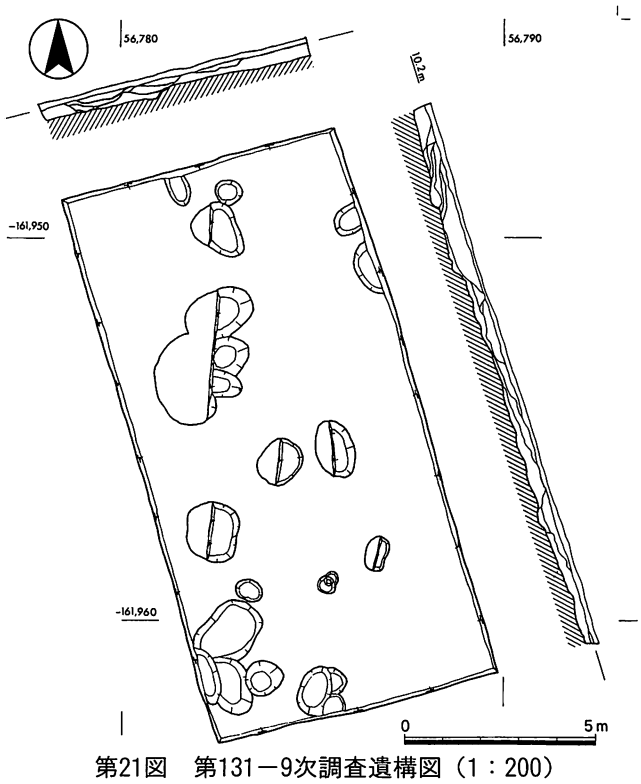
ハ　まとめ　今回の調査では、平安時代にさかのぼる東西方向の溝を検出したものの、その方位は方格地割とは異なるものであり、調査区の面積も小さく、遺構の性格及び牛葉西地区の様相を明らかにすることはできなかった。今後の周辺部での調査事例の蓄積を待って、今回の成果を活用し、当該地区の解明を進めていきたい。　（天野秀昭）

10　第131－9次調査（６ＡＥＤ－Ｓ）

調査場所　多気郡明和町斎宮字篠林3219－3
原　　因　住宅新築
調査期間　平成13年１月16日～１月23日
調査面積　111㎡



第20図　第131－9次調査　調査区位置図（15,000）



第21図　第131－9次調査遺構図（1：200）

１)はじめに　調査区は、「斎王の森」北方約100mの民家に隣接する畑地に位置する。

周辺地域では、昭和45年に実施した斎宮跡の範囲確認調査の他、第81－14、15次（平成元年度）、第85－５次（平成２年度）等の宅地造成に伴う小規模な調査が多い。但し、これらの調査では、第85－５次調査において、鎌倉時代を下限とする２条の溝（ＳＤ6268・6269）を検出した以外は、明確な遺構の存在は確認されていない。

今回の調査では、方格地割以北の土地利用の在り方について、基礎的データの集積が期待された。これは、調査区周辺が北東方向へのなだらかな傾斜地で、地形の変化は、等高線の間隔はもとより、肉眼でも認識が可能な地域であることに因る。方格地割に隣接するこういった環境が、斎宮が機能していた時代において、いかなる役割を担っていたのか、斎宮を取り巻く古環境に関する情報についても、今回の調査でその成果が期待された。

２）調査概要　調査区は、南北15m、東西7.4mで設定した。表土から遺構検出面までの深さは約0.6mで、検出面の標高は、調査区の南端で約10m、北端で約9.8mである。

イ　遺　構　調査区内において、遺構の存在は皆無だった。一見すると土坑や柱掘形を思わせる痕

跡が随所に存在したが、半載して掘り下げ観察した埋土の状況から、遺構ではないと判断した。風倒木根による攪乱、或いは意図的に大木の根を掘り起こした痕跡と思われる。

ロ　遺　物　　表土で極少量の土師器（時期不明）片が出土した以外は、一切認められなかった。

ハ　まとめ　　第65－2次調査（昭和61年度）で確認されている古墳の存在は、単独ではなく、墓域として、当該地区まで広がりを見せる可能性が考えられていた。また同地域が周囲よりも低地であることに因り、第65－2次調査区にて確認されている方格地割外の溝や、冒頭にて述べた第85－５次調査における溝などと呼応する、方格地割内の雨水等を排水するための施設の存在も考えられていた。残念ながら、いずれも確認されるには至らず、方格地割外の環境を直接的に知りうる情報は得られなかった。

但し、同調査区では、立地が低地であるゆえに安定した黒ボク層の存在を確認することができた。黒ボクについては、今回の調査で５つのサンプリングを行なっている。今後は花粉分析等も行い、間接的な古環境復原にも取り組んでいく。　（宇河雅之）

11　第131－10次調査（６ＡＣＭ）

調査場所　　多気郡明和町斎宮字広頭地内
原　　因　　側溝改良工事
調査期間　　平成13年1月11日
調査面積　　36㎡

１）はじめに　　今回の調査地は旧参宮街道である県道から、斎宮小学校へ伸びる南北方向の町道の側溝が老朽化し、また、規格が小さいため排水効率が悪く、たびたび溢水をおこすために既設のＵ字溝を撤去し、新たにコンクリート側溝を設置するために事前の調査を行なった。周辺では住宅密集地のため調査例は乏しいが、斎宮小学校改築に伴う一連の発掘調査のほか、第110－1次調査（平成7年度）や、第117－6次調査（平成8年度）が実施されており、古墳の可能性のある周溝遺構や平安時代後期～中世・近世の遺構・遺物が確認された。

第22図　第131－10次調査　調査区位置図（1：5,000）

２）調査概要　　調査区は町道西側に沿って延長44.3m、幅0.8mのものを設定した。工事に伴う掘削は現況地盤から0.645mの深さで行なうため、遺構の保存上それ以上の深さでは調査を行なわず、遺構面の保護に努めた。

調査の結果、対象とした深度内はすべて近世以降の盛土内に収まり、遺構・遺物はまったくみられなかった。ただし今回の調査区に最も近い第110－1次調査区では現況地盤から0.8～0.9mで遺構面が現れる事が知られており、今回の調査地でもより下部には、遺構面が遺存している可能性は高いと見られる。　（大川勝宏）

付篇１　史跡現状変更等許可申請

平成12年度中の史跡現状変更等許可申請は、42件提出された。このうち発掘調査を行ったのは、史跡の実態解明のための計画発掘調査が1件、個人や公共事業の現状変更に伴うものが10件（うち第131-14次調査は前年度申請分）あった。

そのほかの31件については、宅地敷地内における個人住宅の建設など小規模であったり、工事が簡易で地下遺構に影響を及ぼさないものである。なお、基礎掘削工事にあたっては斎宮歴史博物館並びに明和町教育委員会職員の立会いを実施している。

12年度の申請の内容は、一覧表のとおりであり、これらの申請を（A）個人等から申請されるもの、（B）公共機関等による地域の生活環境整備に伴うもの、（C）史跡環境整備および維持管理等に伴うもの、（D）史跡実態解明のための計画発掘調査実施の申請に分けることができる。

（A）個人等による申請

個人等による申請は21件あった。そのうち事前の発掘調査が必要であったのは7件で、その内容は個人住宅等の新築及び改築（第131-３、４、５、８、９次調査）が５件、駐車場の造成（第131-６次調査）と宅内排水管設置（第131-７次調査）である。

他の14件については、個人住宅や倉庫等の新築や撤去で土地利用区分の第四種保存地区にあたり、工事立会い等の条件付許可により、史跡に影響を及ぼすことなく施工している。

ただし、個人住宅等に付属する合併浄化槽の設置部分については、立会い調査を実施しており、今年度は5件（うち第131-14次調査は前年度申請分）あった。その結果報告は、付篇２に掲載している。

（B）公共機関等による地域の生活環境整備に伴う申請

この申請は13件の提出があった。その内容は、既設道路の舗装や側溝等の改修が８件、電柱の移設が１件、消防施設関係が２件、鉄道関係が1件である。この内調査対象となったものは、上水道管埋設に伴う第131-２次調査と側溝改良に伴う第131-10次調査の２件で、そのほかは工事立会いで着工している。

（C）史跡環境整備および維持管理等に伴う申請

史跡の整備及び活用に伴う申請は７件あった。その内容は、史跡管理用道路の整備に伴う鉄道施設の移設が２件、砂利広場等の整備が２件、案内標識の設置や撤去が２件、史跡整備工事に伴う仮舗装が１件である。

（D）計画発掘調査のための申請

これは、三重県教育委員会が主体となり、斎宮歴史博物館が実施しているもので、１件の申請が提出され1,600㎡が調査された。これらの内容については斎宮歴史博物館から別途調査概報が刊行されている。

（中野敦夫）

第2表　平成12年度　現状変更等許可申請一覧表

	申請地	種別	申請者	変更内容	申請日	許可日	変更面積	区分	備考
1	竹川字東裏262-3	B	明和町（総務課）	消防車庫設置	12.4.3	12.6.12	65.65㎡	4	
2	斎宮字塚山3337-4	A	久保雅敬	住宅新築	12.4.3	12.7.11	72.87㎡	4	
3	斎宮字楽殿2894-4	A	中川聡樹	住宅新築	12.4.14	12.7.17	85.49㎡	4	立会い調査（第131-13次調査）
4	斎宮字西加座2691ほか2筆	D	三重県教育委員会	発掘（計画）調査	12.4.28	12.5.23	1,400㎡	2	第130次調査
5	斎宮字塚山3337-5	A	山本晴彦	住宅新築	12.4.28	12.7.11	84.88㎡	4	立会い調査（第131-15次調査）
6	斎宮字牛葉571	A	山本憲一	住宅新築	12.4.27	12.6.12	69.87㎡	4	第131-3次調査
7	竹川字東裏362-4ほか9筆 斎宮字広頭3385-5	B	近畿日本鉄道株式会社	ネットフェンス柵新設及び防草シート設置	12.5.17	12.6.9	L=87m 216㎡	4	
8	斎宮字下園2928-4	A	向井実	建物撤去及びブロック塀と仮設物の設置	12.5.31	12.7.11	1棟	4	
9	斎宮字西加座2773-1	A	細井建設	事務所改築	12.6.6	12.8.9	80.16㎡	4	第131-4次調査
10	斎宮字楽殿2877-6ほか8筆	B	明和町（建設課）	町道舗装	12.6.13	12.7.12	L=110m	3	
11	斎宮字中西613ほか12筆	B	明和町（建設課）	町道舗装	12.6.13	12.7.12	L=170m	3	
12	竹川字南裏253	A	高木若素	ブロック塀の設置	12.6.16	12.7.12	L=35.3m	4	
13	斎宮字中西2751	A	木谷行生	住宅除去	12.6.20	12.8.1	59.4㎡	4	
14	竹川字中垣内384-3ほか13筆	B	明和町（建設課）	町道オーバーレイ	12.6.21	12.7.12	L=120m	2	
15	竹川字東裏282-1	B	明和町（総務課）	水道管布設	12.6.27	12.8.9	L=3.8m	3	第131-2次調査
16	斎宮字牛葉3405-5	B	明和町（総務課）	消防車庫除去	12.6.27	12.8.1	48.07㎡	4	
17	斎宮字塚山3337-3	A	池山浩 池山ひとみ	住宅新築	12.7.19	12.11.13	218.20㎡	4	
18	斎宮字西加座2773-3	A	株式会社　村田組	インターロッキング布設工事	12.7.19	12.9.1	72.16㎡	4	
19	斎宮字東前沖2494-2	A	楠本誠	住宅新築	12.7.28	13.1.5	84.25㎡	3	第131-5次調査
20	斎宮字東前沖2505-2	A	中川満裕	駐車場造成工事	12.8.7	13.1.5	303.98㎡	3	第131-6次調査
21	斎宮字楽殿2918-4	A	畑中恒雄	倉庫及び住宅撤去	12.8.17	12.10.2	302.24㎡	4	
22	斎宮字鈴池340-1	A	永島忠	盛土整地	12.8.18	--	1,259㎡	3	12.12.18付け申請取り下げ
23	斎宮字牛葉3397-2	A	中川肇二	排水管設置	12.8.18	12.9.18	33m	4	第131-7次調査
24	斎宮字東前沖地内	B	明和町（建設課）	側溝新設	12.9.5	13.8.14	36m	3	
25	斎宮字篠林3134-1	C	斎宮歴史博物館	隅きり部の仮舗装	12.9.11	12.10.12	11.87㎡	1	
26	斎宮字広頭3388-8・9	A	奥山正一	住宅新築	12.9.19	12.11.6	123.44㎡	3	立会い調査（第131-11次調査）
27	斎宮字牛葉地内 竹川字東裏地内	B	明和町（建設課）	側溝改良工事	12.9.29	12.11.13	44.3m	3	第131-10次調査
28	斎宮字内山3045	C	斎宮歴史博物館	史跡整備事業地看板の設置	12.10.27	12.11.9	1か所	1	
29	斎宮字御館2975-2他	A	須賀幹雄	住宅新築	12.11.1	13.5.16	81.08㎡	3.4	第131-8次調査
30	斎宮字篠林3219-3	A	森下純	住宅新築	12.11.10	13.5.16	125.87㎡	3	第131-9次調査
31	斎宮字西加座地内	B	明和町（建設課）	町道の部分舗装	12.11.16	12.11.27	8m	1	
32	斎宮字内山3020-5ほか8筆	C	近畿日本鉄道株式会社	ネットフェンス等の撤去と建植	12.11.20	12.12.12	L=200m 18本	4	
33	斎宮字牛葉3036-2	A	加藤浩史	浄化槽設置	12.11.21	13.1.4	1基	4	立会い調査（第131-12次調査）
34	竹川字南裏249	A	田所敏男	住宅除去	12.12.15	13.2.5	43.79㎡	4	
35	斎宮字笛川地内 竹川字中垣内地内	B	三重県（松阪地方県民局建設部）	県道舗装修繕	12.12.22	13.1.17	L=256m L=352m	3	
36	斎宮字内山3045-3ほか1筆	C	株式会社メディアート中部支社	看板撤去新設	12.12.25	13.1.25	2か所	4	
37	斎宮字鈴池333-1ほか1筆	A	八田明美	住宅新築	13.1.18	13.3.19	66.66㎡	3	
38	斎宮字内山3043-17	C	明和町教育委員会（斎宮跡課）	史跡説明板撤去	13.2.21	13.3.9	一基	3	
39	竹川字東裏地内	B	中部電力株式会社 松阪営業所	電柱移設	13.3.5	13.3.22	2本	3	
40	斎宮字西加座2669ほか5筆	C	明和町教育委員会（斎宮跡課）	広場造成工事	13.3.28	13.5.16	1,410㎡	1	
41	斎宮字御館2938-1ほか1筆	C	明和町教育委員会（斎宮跡課）	盛土工事	13.3.28	13.5.16	1,000㎡	1	
42	斎宮字西加座地内	B	明和町（建設課）	町道法面改修	13.3.28	13.4.11	L=11m	1	

付篇２　立 会 い 調 査

第１３１－１１次調査

調査場所　　多気郡明和町斎宮字広頭3388－8,9
原　　因　　住宅新築
調査期間　　平成12年12月８日
調査面積　　3.3㎡

第23図　第131－11次調査　調査区位置図（1：5,000）

１）はじめに　　今回の調査区は、史跡中央部の斎宮小学校の東側にあたる第三種保存地区において、住宅の新築に伴い、基礎の立会い及び浄化槽の設置に伴う発掘調査を実施したものである。

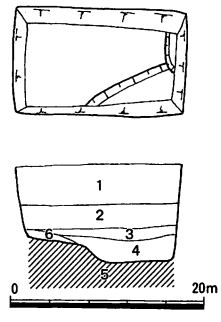
周辺では、斎宮小学校建設に伴う緊急調査第15次調査（昭和52年度）をはじめ、現状変更に伴う小規模な調査が実施され、四脚門、円形周溝などが確認されている。

２）調査概要

イ　遺　構　　調査は、浄化槽設置にかかわる東西約2.3m、南北約1.4mの範囲について実施した。厚さ約0.5mの造成盛土下に旧表土が約0.3m堆積し褐色粘質土の遺物包含層が約0.15m更に堆積し、黄橙色粘土層の遺構検出面に至る。溝あるいはピット状の落込みを２か所確認した。

ロ　遺　物　　溝状の遺構から須恵器片、ピット状の遺構から土師器の細片が出土した。

ハ　まとめ　　この地区では、平安時代後期以降の遺構が密集する地区でもあり、小規模な調査でも積み上げていけば、全体像が見えてくるであろう。　　（駒田利治）



① 造成盛土（山砂）
② 腐蝕分の多い黒色壌土（旧表土）5Y2/1
③ 黒褐色壌土2.5Y3/2
④ わずかに砂質含む黒色壌土10YR2/1
⑤ 黄橙色粘土10YR8/6地山
⑥ 黒褐色粘質壌土10YR3/2

第24図　第131－11次調査
遺構実測図（1：100）

第１３１－１２次調査

調査場所　　多気郡明和町斎宮字牛葉3036－2
原　　因　　浄化槽設置
調査期間　　平成12年12月19日
調査面積　　3.5㎡

１）はじめに　　今回の調査区は、史跡中央部で旧参宮街道南の住宅密集地内において、浄化槽の設置に伴い、発掘調査を実施したものである。

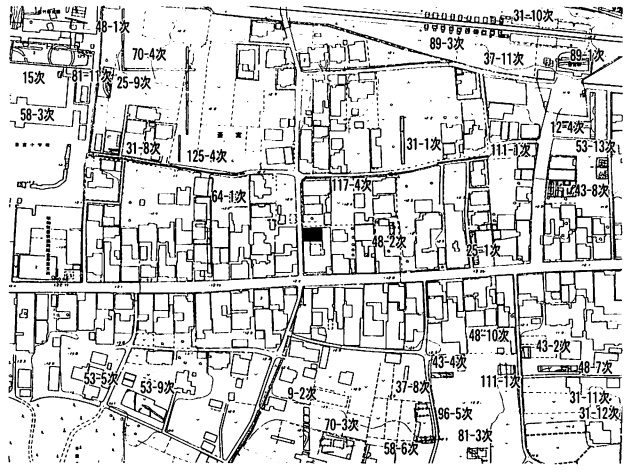
周辺では、住宅建築あるいは排水路や水道管の新設・改修工事にかかる小規模な調

査が行われているのみで全体像を把握するには至っていない。

2）調査概要

イ　遺　構　　調査は、浄化槽設置にかかわる東西約2.6m、南北約1.6mの範囲について実施した。表土のコンクリート舗装下に厚さ0.2mの盛土がなされており、その下層に約0.5mの灰オリーブ色粘質土の遺物包含層が堆積する。

この下部から、黄橙色粘土の遺構検出面を掘り込んで幅約1.1m、深さ約0.4mの東西方向の溝を確認した。

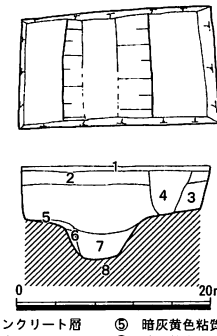


第25図　第131－12次調査　調査区位置図（1：5,000）

ロ　遺　物　　溝からは、近世陶磁器や巴文軒丸瓦の破片が出土しており、溝は近世に埋没したものと考えられる。

ハ　まとめ　　この地区での調査は、小規模な調査が多く遺構の全体的な詳細は不明であるが、奈良時代から近世まで幅広く遺物が出土しており、今後の調査が期待される。

（駒田利治）



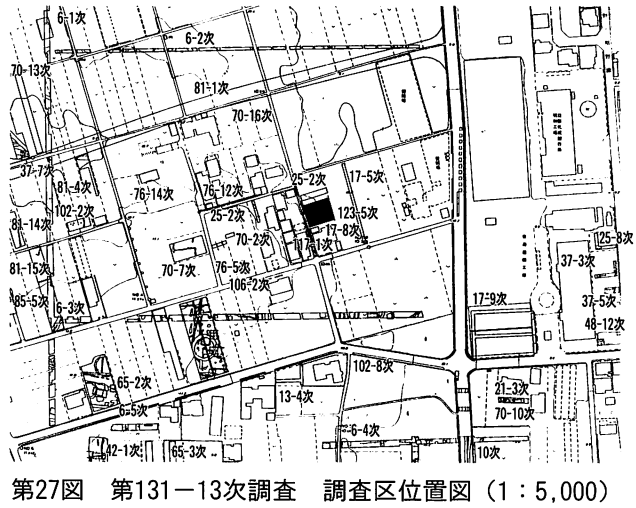
第26図　第113－12次調査遺構実測図（1：100）

第１３１－１３次調査

調査場所	多気郡明和町斎宮字楽殿2894－4
原　　因	住宅新築
調査期間	平成13年１月９日
調査面積	5.7㎡

1）はじめに　　今回の調査区は、史跡北東部で歴史の道から南に100mほどの第三種保存地区に位置する。

周辺では現状変更に伴う小規模な緊急発掘調査が行われており、第117－1次調査（平成8年度）に接する地点である。また、調査区西側を南北に延びる町道の側溝新設に伴い発掘調査を行った第123－５次調査（平成9年度）では、史跡北辺を弯曲して巡る鎌倉時代の大溝ＳＤ8034を確認しており、その位置関係からは大溝の北側に位置することとなる。



第27図　第131－13次調査　調査区位置図（1：5,000）

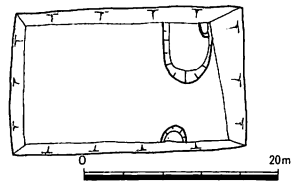
2）調査概要

イ　遺　構　　調査は、浄化槽設置にかかわる東西約3.0m、南北約1.9mの範囲について実施した。厚さ約0.4mの盛土の下に、黒褐色粘質土の遺物包含層が約0.3m堆積し、黄橙色粘土の遺構検出面がある。ピット状の落込みが確認できたが、形状及び埋土から樹根痕と

考えられる。

ロ　遺　物　大きなピット状の落込みから須恵器の破片が１点出土した。

ハ　まとめ　鎌倉時代大溝の北側、すなわち外側と考えられる地区の状況を解明することは、大溝の性格を考究するうえで重要であり、大溝の追跡と合わせて検証していく必要がある。（駒田利治）



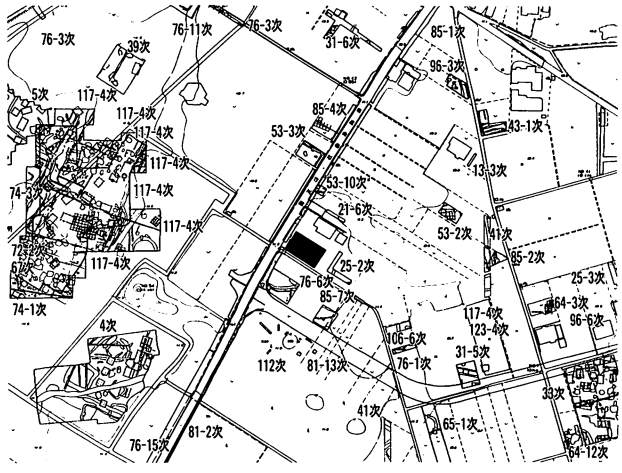
第28図　第131－13次調査
遺構実測図（1：100）

第１３１－１４次調査

調査場所　多気郡明和町斎宮字古里3270－4
原　　因　住宅新築
調査期間　平成12年10月11日
調査面積　6.6㎡

１）はじめに　今回の調査区は、史跡北西部の県道南藤原竹川線沿いの第三種保存地区に位置する。

周辺では、第85－７次調査（平成２年度）、第112次調査（平成7年度）で確認している鎌倉時代の大溝の北側に位置する。



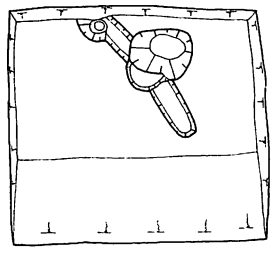
第29図　第131－14次調査　調査区位置図（1：5,000）

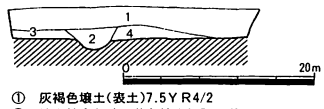
２）調査概要

イ　遺　構　調査は、浄化槽設置にかかわる東西約3.5m、南北約3.1mの範囲について実施した。厚さ約0.4mの灰褐色砂質土の下に、黒色粘質土の遺物包含層が約0.2m堆積し、橙色粘土の遺構検出面がある。この粘土層上面で溝及びピット状の落込みを確認した。

ロ　遺　物　遺物は、遺構埋土及び包含層からも土師器の細片のみで時期決定の遺物とはし難い。

ハ　まとめ　鎌倉時代の大溝の北側にあたるこの調査区でも明瞭な遺構は確認することができなかった。第131－13次調査等の結果も踏まえ検討を要する。（駒田利治）





① 灰褐色壌土(表土)7.5Y R4/2
② 地山粒含む暗灰黄色壌土2.5Y 4/2
③ 黒色シルト質壌土５Y 2/1
④ 橙色粘質土(地山)7.5Y R6/6

第30図　第131－14次調査
遺構実測図（1：100）

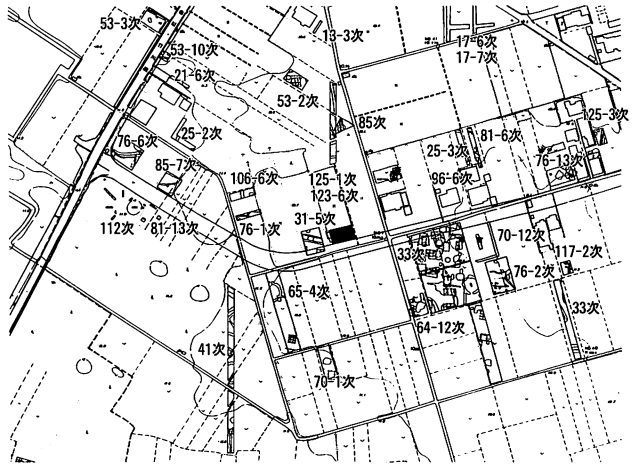
第１３１－１５次調査

調査場所　多気郡明和町斎宮字塚山3337－5
原　　因　住宅新築
調査期間　平成12年10月11日
調査面積　6.6㎡

１）はじめに　今回の調査区は、史跡西部の歴史の道沿いの北側に住宅を新築する現状変更に伴い

実施したものである。

当該地区は、既に第125－１次調査（平成10年度）に緊急調査を実施しており、盛土された現表土下約0.7mには、遺構面が確認されており、住宅建築は、遺構に影響を及ぼさないよう行い、浄化槽設置にあたっても遺構の極めて薄い所を選定した。



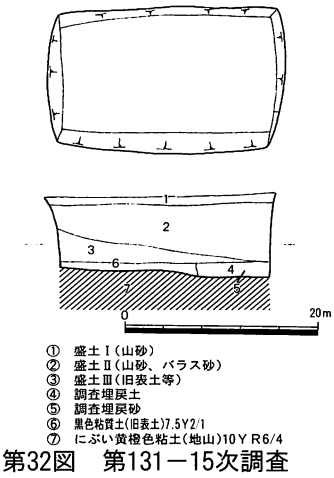
第31図　第131－15次調査　調査区位置図（1：5,000）

2）調査概要

イ　遺　構　調査は、浄化槽設置にかかわる東西約3.1m、南北約2.0mの範囲について実施した。厚さ約0.7m盛土の下に、約0.2mの第125－１次調査の埋め戻し土が堆積している。遺構は、認められない

ロ　遺　物　遺物も認められない。

ハ　まとめ　調査としては、第125－１次調査として『史跡斎宮跡平成10年度現状変更緊急発掘調査報告』（三重県多気郡明和町　斎宮跡埋蔵文化財発掘調査報告16　明和町教育委員会　2000）として報告している。　（駒田利治）



第32図　第131－15次調査
遺構実測図（1：100）

第３表　第131次調査　遺物(土器)観察表

131-5次　遺物観察表

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	SK8324	土師器 小皿	口径 7.6	器高1.6　口縁部ヨコナデ、内外面ナデ、オサエ	密	良好	内；橙 5YR6/8 ～にぶい黄橙 10YR6/3 外；橙 5YR6/8 ～にぶい黄橙 10YR6/3	30%		R３
2	SK8324	土師器 小皿	口径 9.0 器高 1.5	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ、オサエ	密	良好	内；橙 7.5YR6/6 外；橙 7.5YR6/6	40%		R４
3	SD8326	陶器 山茶碗	高台径 7.0 残存高 2.3	内外面ロクロナデ、貼り付け高台	密	良好	内；灰白 5Y7/1 外；灰白 5Y7/1	高台部 80%		R５
4	SD8326	陶器 山茶碗	高台径 7.5 残存高 2.5	内外面ロクロナデ、貼り付け高台	密	良好	内；灰白 5Y7/1 外；灰白 5Y7/1	高台部 50%		R６
5	SD8325	陶器 山茶碗	高台径 7.2 残存高 2.3	内外面ロクロナデ、貼り付け高台	密	良好	内；浅黄 2.5Y7/3 ～黄灰 2.5Y5/1 外；浅黄 2.5Y7/3 ～黄灰 2.5Y5/1	高台部のみ		R１
6	SD8325	陶器 山茶碗	口径 17.4 器高 5.5 高台径 7.7	内外面ロコロナデ、貼り付け高台	密	良好	内；灰黄 2.5Y6/2 ～黄灰 2.5Y6/1 外；灰黄 2.5Y6/2 ～黄灰 2.5Y6/1	40%		R２
7	包含層	土師器 台付皿	口径 8.1 器高 4.5 高台径 7.2	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ、、貼り付け高台	密	良好	内；橙 7.5YR6/6 外；橙 7.5YR6/6	ほぼ完形		R８
8	包含層	土師器 甕	口径 26.0 残存高 8.1	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ、オサエ	密	良好	内；にぶい橙 2.5YR6/4 外；にぶい橙 2.5YR6/4	口縁部 20%		R７
9	包含層	陶器 山茶椀	高台径 7.4 残存高 2.5	内外面ロコロナデ、貼り付け高台	密	良好	内；灰白 5Y7/1 外；灰白 5Y7/1	高台部 90%		R９
10	包含層	須恵器 鉢	口径 28.0 残存高 9.0	内外面ロコロナデ	密	良好	内；灰白 5Y7/1 外；灰白 5Y7/1	20%		R10

付篇３　不同沈下のための地盤改良結果報告

１．はじめに

史跡斎宮跡の個人住宅等の現状変更に伴う事前発掘調査は、昭和54年の指定以来、約200件に達している。そのほとんどが、小規模なものであるが、保存する立場からは、構造物が地下遺構に影響を及ぼす不安が、地権者側からは、構造物が不同沈下することへの不安などがあり発掘調査後どのような埋め戻しをしたらよいかが長年の課題であった。

このことから、地権者の代表と先進地の視察や埋め戻し方法の協議などをたびたびおこなってきたが、有効な解決手段が見つかっていないのが現状である。

しかし、阪神・淡路大震災以降の住宅建築においては、地震対策等が重視されるようになり、地盤補強に低価格で個人住宅にも採用しやすい資材が開発されようになった。

そこで調査後の埋め戻しについても、住宅建築で地盤補強に使用するセメント固化材を混ぜる方法を採用することで、構造物が地下遺構に及ぼす影響や構造物の不同沈下を防ぐことが可能になるかどうか、今回初めて試験的に実施することとなった。

２．構造物下の調査方法と埋め戻しの手順

今回試験的に実施する場所は、検討期間中であることから、構造物の下を対象とするのではなく、従来どおり構造物を避けて調査区を設定した。しかし、調査方法、埋め戻し方法などは、構造物の下を掘ることを想定し、下記に掲げる手順で実施することとした。

① 調査方法は、遺構検出まで従来の調査と同じ方法で行う。

② 遺構掘り下げは、完全に掘りきることをせず、遺構の重複や規模・時期等を判断するための最小限の掘り下げに止めることとする。

③ 写真・遺構実測等の調査は同じ方法で行う。

④ 埋め戻しに使用する土を採取し、土質安定処理試験（室内配合試験）を行い、固化材の添加量を決める。

⑤ 埋め戻しは、遺構保護のため砂（川砂を使用）を厚さ10cm入れ、水やランマーで敷き固める。

⑥ 砂の上に、調査時の土を厚さ20cm埋め戻し、ランマーで敷き固める。
（①～③、⑤⑥は発掘調査員および作業員で行う）

⑦ 埋め戻す土とセメント固化材を重機で混ぜながら埋め戻し、重機で踏み固める。

⑧ 土質安定処理試験（現場施行品質管理試験）を行い、地盤改良の目標強度の有無を調べる。（④、⑦、⑧は業者委託）

３．地盤改良結果

① 埋め戻しに使用する土を採取し、住宅建築に必要な強度を得るためにはどれだけの固化材配合すればよいか配合試験を実施した。（上記手順④）

通常、一般住宅の改良目標は、接地圧５ｔｆ/㎡に耐えられる地盤強度であることから、配合試験の結果、現場平均強度ｑｆ＝1.37kgｆ/㎠を得る必要があり、それを得るための固化材添加量は120kg/㎥となった。

地盤改良の対象面積は、調査面積76㎡のうち浄化槽部分を除いた約66㎡である。深さは0.5mあり、埋め戻しの土量は33㎥である。上記の配合試験の数値から計算すると固化材が3.96トン必要となる。

② 実際、現場においては、１袋１トン入りを４袋使用した。

③ セメント固化材による改良作業後、改良土を３ヶ所採取して、強度が得られたかどうかを試験した。(手順⑧)

その結果、改良目標の現場平均強度ｑｆ＝1.37kgｆ/㎠以上に対して、約２倍の平均値ｑｆ＝2.78ｇｆ/㎠を得ることができた。

４．まとめ

今回はじめて埋め戻しの土にセメント系固化材を混合し、地盤改良を行った結果、平均強度は２倍の数値を得ることができた。しかし、改良後のサンプルは表層だけであり、重機による混ぜ方がよかったかどうかも今後の検討課題である。

また、遺構保護の砂の厚さや使用する砂の種類が「川砂」か「山砂」か、どこまでの地盤改良が調査で行う埋め戻しの範囲なのか、さらにメンテナンスについても今後検討していかなければならない。

以上、検討課題も多いが、試験的に実施したセメント系固化材を使用した埋め戻し作業を地権者の代表者に見てもらったことは、構造物が不同沈下することへの不安解消へ一歩前進したことであり、今後も条件が整った現状変更に伴う発掘調査については、今回のような方法で実施し、多くの地権者に見てもらい理解と納得が得られるよう努力していきたい。

（中野　敦夫）

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせい12ねんど　げんじょうへんこうきんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	史跡斎宮跡　平成12年度　現状変更緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県多気郡明和町　斎宮跡埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	18
編著者名	駒田利治・泉　雄二・大川勝宏・西村美幸・天野秀昭・宇河雅之・中野敦夫・瀬田敏彦・宇都宮英治
編集機関	斎宮歴史博物館・明和町
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 0596-52-3800
発行年月日	２００２年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
さいくうあと 斎宮跡	たきぐんめいわちょうおおあざさいくうほか 多気郡明和町大字斎宮他	24442	210	331～332	1336～1337			
第131-１次調査	竹川字祓戸741					20000407	68	進入路造成
第131-２次調査	竹川字東裏282-1					20000821	7	水道管布設
第131-３次調査	斎宮字牛葉571					20000705	6	住宅新築
第131-４次調査	斎宮字西加座2773-1					20000828	38	事務所改築
第131-５次調査	斎宮字東前沖2494-2					20000921～000922	76	住宅新築
第131-６次調査	斎宮字東前沖2505-2					20000919～000921	108	駐車場造成工事
第131-７次調査	斎宮字牛葉3397-2					20000926～000927	18	排水管埋設
第131-８次調査	斎宮字御館3011ほか					20010115～000119	50	住宅新築
第131-９次調査	斎宮字篠林3219-3					20010116～000123	111	住宅新築
第131-10次調査	斎宮字広頭地内					20010111	36	側溝改良工事
第131-11次調査	斎宮字広頭3388-8,9					20001208	3	住宅新築
第131-12次調査	斎宮字牛葉3036-2ほか					20001219	4	浄化槽設置
第128-13次調査	斎宮字楽殿2894-4					20010109	6	住宅新築
第131-14次調査	斎宮字古里3270-4					20001011	7	住宅新築
第131-15次調査	斎宮字塚山3337-5					20001011	7	住宅新築

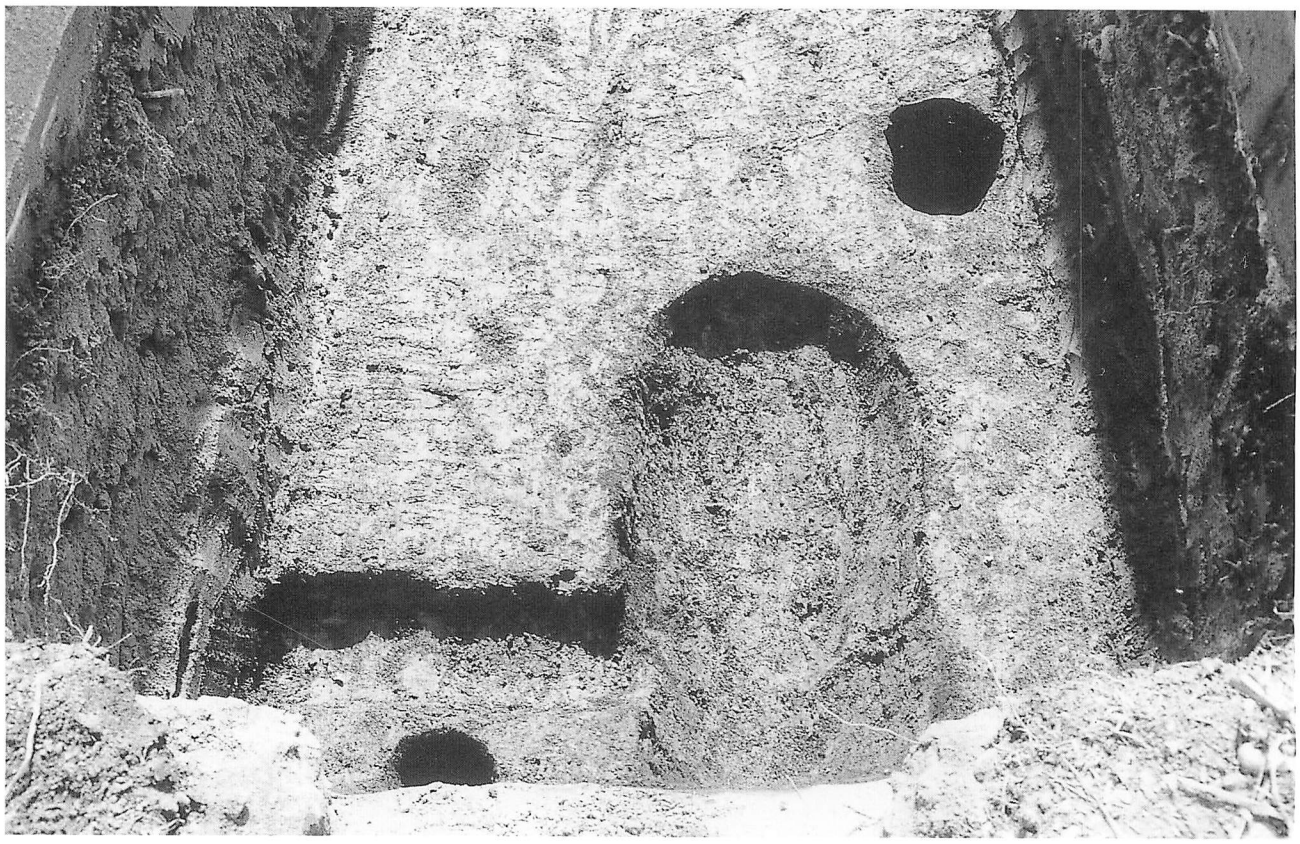
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	宮殿				
第131-１次調査		江戸	溝	陶磁器	
第131-２次調査					包含層内で調査終了
第131-３次調査		不明	溝	土師器	
第131-４次調査		奈良以降	方格地割区画道路、溝	土師器	
第131-５次調査		平安後期	溝、土坑	土師器、山茶椀、陶器	
第131-６次調査		鎌倉	溝	土師器、山茶椀	
第131-７次調査		近代	溝	陶磁器	
第131-８次調査		平安	溝	土師器、山茶椀	
第131-９次調査		不明	風倒木		
第131-10次調査		近世 〃	近世の盛土整地層	陶磁器	
第131-11次調査		平安	溝、ピット	土師器、須恵器	
第131-12次調査		不明	溝	陶磁器、巴文軒丸瓦	
第131-13次調査		近世	ピット小穴	土師器、須恵器	
第131-14次調査		不明	溝、ピット	土師器	
第131-15次調査		不明	なし	なし	

図　　版

調査前全景（南から）

調査区全景（南から）

２次調査区全景（南から）



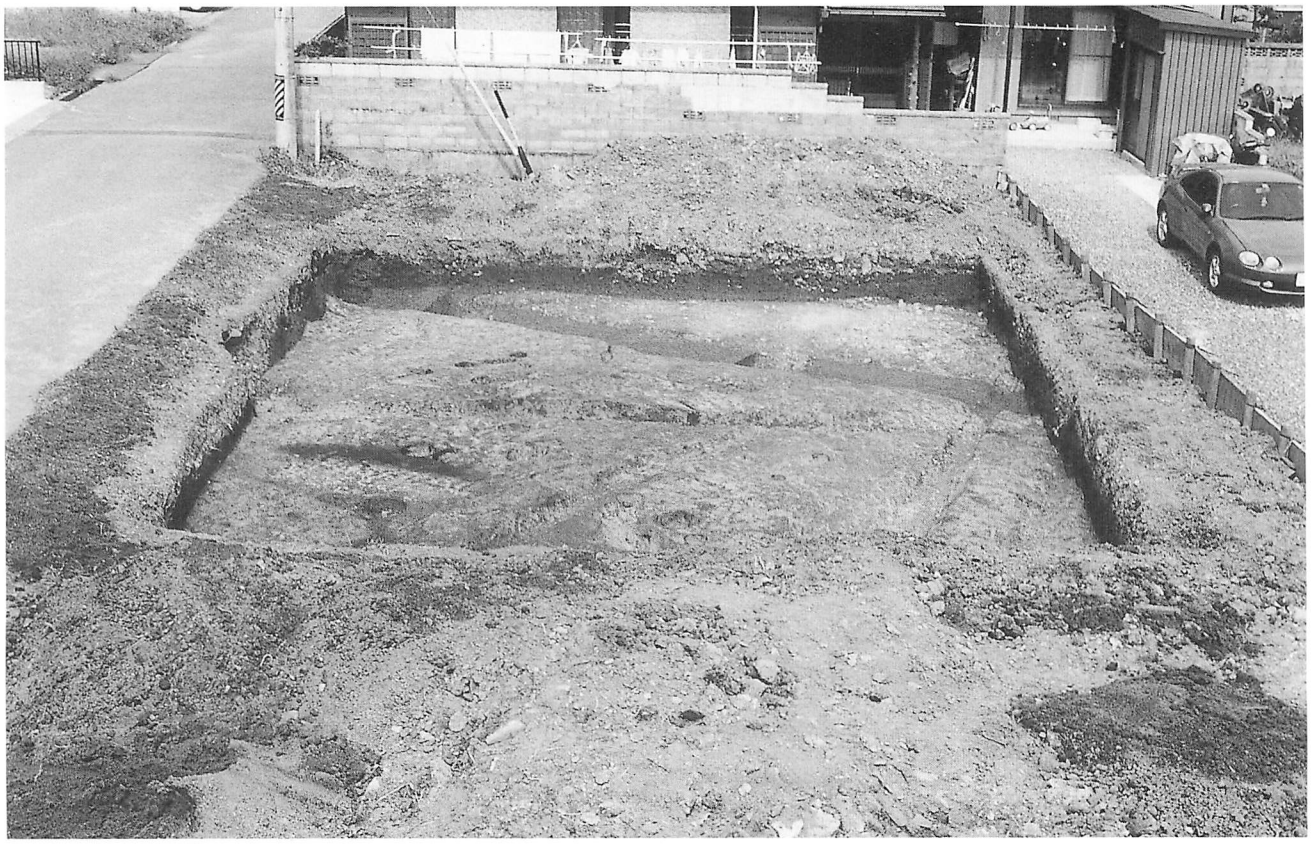
４次調査Ｇ１（東から）

Ｇ５（西から）

Ｇ６（西から）

調査区全景（西から）

調査後近景（北から）



調査区全景（南から）

調査後近景（西から）

調査区全景（北から）

調査区全景（北から）

調査区全景（南から）

調査後近景（西から）

史 跡 **斎 宮 跡**

平成12年度

現状変更緊急発掘調査報告

平成14(2002)年2月28日

編　　集　斎宮歴史博物館
　　明　　和　　町

発　　行　明　　和　　町

印　　刷　光出版印刷株式会社